

平成 22 年 6 月 24 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）  
 研究期間：2008 ～ 2009  
 課題番号：20830138  
 研究課題名（和文） 短期大学生の「居場所環境」形成プロセスとキャリア・アイデンティティに関する研究  
 研究課題名（英文） Study on the Formation Process of “The Environment of Ibasho (Existential Place)” and the Career Identity of Junior College Students  
 研究代表者  
 杉本 希映 (SUGIMOTO KIE)  
 湘北短期大学・生活プロデュース学科・講師  
 研究者番号：90508045

研究成果の概要（和文）：本研究は、研究 1 として、短大入学時の「居場所環境」形成プロセスの検討、研究 2 として、「居場所環境」形成に影響を及ぼす規定要因（個人特性・大学における学生支援・課外活動）の探索的検討、研究 3 として、「居場所環境」形成がアイデンティティ、キャリア選択に及ぼす影響の検討の 3 つを目的とした。調査対象は、短期大学生、調査方法は、縦断調査とインタビュー調査によりデータを収集し、その結果を考察した。

研究成果の概要（英文）：There are three purposes in this study as follows:

1. Consideration of the formation process of “the environment of ibasho” when entering junior college.
2. Exploratory research on the factors affecting the formation of “the environment of ibasho” such as personal characteristics and the student assistance program in college.
3. Examination of the influence of the formation of “the environment of ibasho” on identity and career selection.

The targets of the survey are junior college students. The data were collected by the methods of longitudinal survey and interview survey.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	990,000	297,000	1,287,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,690,000	507,000	2,197,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：「居場所環境」 短期大学生 アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

昨今の「居場所」への注目は、1980 年代の不登校問題から発したと言われている（安斎、

2003；住田, 2003)。文部省は、「登校拒否（不登校）問題について－児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して－」という報告を出し、

学校内での「心の居場所づくり」の必要性を指摘した(文部省, 1992)。この動きを受けて1990年代以降、「居場所」に関する構造分析の研究、発達的变化の研究など実証的な研究がなされるようになる。その中で、筆者は「居場所環境」という、質の異なる「居場所」を個人がどのようなバランスで持っているかを包括的に捉える概念を導入した(図1)。その結果、「居場所環境」と大学生のアイデンティティ確立との関連が示唆された。青年期のアイデンティティに関する研究は、これまでに数多く見受けられるが、短大生を対象とした研究は、キャリア形成、キャリア・アイデンティティ、職業レディネスなど、職業に関係するものが散見される程度である。短期大学(以下、短大)が、早期の就職を目的とした学生の学ぶ場として機能してきた歴史を考えると、近年のフリーターやニートの増加、離職率の高さといった社会問題に対し、短大が学生のアイデンティティ確立にいかなる役割を果たしているのかを検討することは、意義にあることと考えられる。

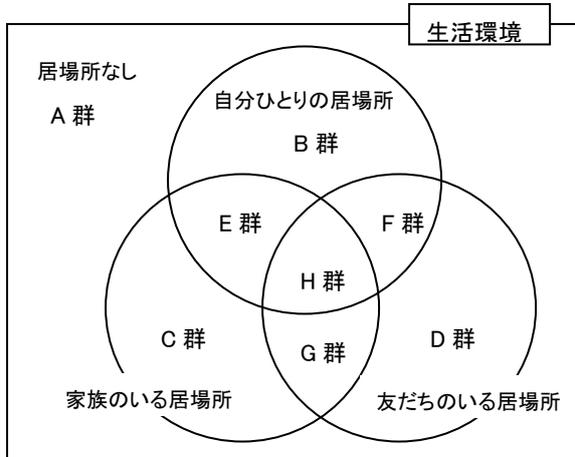


図1 「居場所環境」の概念図

## 2. 研究の目的

以上を踏まえ本研究では、短大生の「居場所環境」が、アイデンティティ、キャリア・アイデンティティ確立に及ぼす影響を検討することを目的とする。具体的な目的は以下の3点である。

- <目的1> 短大入学時からの「居場所環境」形成プロセスの検討[研究1]
- <目的2> 「居場所環境」形成に影響を及ぼす規定要因(個人特性・短大の学生支援プログラム)の探索的検討[研究2]
- <目的3> 「居場所環境」形成がアイデンティティ、キャリア・アイデンティティ確立に及ぼす影響の検討[研究3]

## 3. 研究の方法

短大生を対象に、2回の縦断的質問紙調査(2009年6月、2010年1月に同一学生を対

象)と、面接調査を実施した。質問紙調査は、量的データ分析に使用されるSPSSを使用し、面接調査は、質的なデータ分析法であるM-GTA(木下, 1999)を用いて分析した。

## 4. 研究成果

(1) 短大入学時からの「居場所環境」形成プロセスの検討[研究1]

### ① 「居場所環境」の変化

1回目と2回目の調査における「居場所環境」を比較すると(表1)、最も多かったのがG群(家族+友だち)なのは同じであるが、1回目と比べ2回目はA群(なし)とG群が増えていることが明らかとなった。

表1 「居場所環境」の度数分布

	1回目		2回目	
	n	(%)	n	(%)
A群(なし)	4	(4.5)	15	(11.8)
B群(ひとりのみ)	5	(5.7)	2	(1.6)
C群(家族のみ)	10	(11.4)	10	(7.9)
D群(友だちのみ)	3	(3.4)	3	(2.4)
E群(ひとり+家族)	4	(4.5)	4	(3.1)
F群(ひとり+友だち)	7	(8.0)	5	(3.9)
G群(家族+友だち)	32	(36.4)	54	(42.5)
H群(3種類すべて)	23	(26.1)	34	(26.8)
合計	88		127	

### ② 短大における「居場所」の心理的機能の変化

1回目と2回目の調査における「居場所」の心理的機能尺度を因子分析(主因子法・プロマックス回転)した結果、第1因子は「思考内省・他者からの自由」、第2因子は「被受容感・精神的安定」、第3因子は「自己肯定感」という両方に共通する3因子構造が得られた。下位尺度ごとに項目得点を足し、項目数で割った値を下位尺度得点とし、各平均値で高低群分けを行った。さらに、短大における「居場所」の心理的機能の変化を検討するために、1回目と2回目の各下位尺度得点の変化から、「低低群(1回目2回目ともに低群)」「低高群」「高低群」「高高群」の4つに分類した。この結果を $\chi^2$ 検定した結果(表2)、「I 思考内省・他者からの自由」では、低高群と高低群が少なく、低低群と高高群が多かった( $\chi^2(3) = 15.89, p < .01$ )。「II 精神的安定・被受容感」では、有意差は認められなかった( $\chi^2(3) = 1.20, n.s.$ )。「III 自己肯定感」では、「低低群」が多く、「高低群」が少なかった( $\chi^2(3) = 10.59, p < .05$ )。

これらの結果より、「居場所環境」や短大における「居場所」機能は、個人内で変化し

ている学生がいることが明らかとなった。このことより、学生は最初に持つ「居場所環境」や大学における「居場所」機能を2年間持ち続けているのではなく変化し得るものである、つまり介入の可能性があることが確認できたと考える。

表2 短大における「居場所」の心理的機能の変化

	Ⅰ 思考・内省・ 他者からの自由		Ⅱ 精神的安定・ 被受容感		Ⅲ 自己肯定感	
	n	残差	n	残差	n	残差
低低群	23	6.0	17	-3	26	8.8
低高群	14	-3.0	15	-2.3	18	.8
高低群	5	-12.0	16	-1.3	7	-10.3
高高群	26	9.0	21	3.8	18	.8
合計	68		69		69	

(2) 「居場所環境」形成に影響を及ぼす規定要因(個人特性・短大の学生支援プログラム)の探索的検討[研究2]

①1年次初めの1泊2日の学外オリエンテーションとの関連

大学における「居場所」の心理的機能が学外オリエンテーション満足度低群と高群で差があるかを  $t$  検定で検討した結果、下位尺度すべてで有意差が認められ、満足度高群の方が低群よりも有意に高かった(順に、 $t(153)=2.72, p<.01$   $t(154)=2.03, p<.05$   $t(156)=2.10, p<.05$   $t(157)=2.49, p<.01$ )。

②サークル活動との関連

大学における「居場所」の心理的機能がサークル活動の満足度低群と高群で差があるかを  $t$  検定で検討した結果、「自己肯定感」で有意差が認められ、満足度高群の方が低群よりも有意に高かった( $t(156)=2.10, p<.05$ )。

③委員会活動との関連

大学における「居場所」の心理的機能が委員会活動の満足度低群と高群で差があるかを  $t$  検定で検討した結果、「自由」と「自己肯定感」で有意差が認められ、満足度高群の方が低群よりも有意に高かった(順に、 $t(153)=2.63, p<.01$   $t(156)=2.34, p<.05$ )。

「居場所」の心理的機能の下位尺度と関連があったのは、1泊2日のオリエンテーションであった。この行事の満足度が高いと大学における「居場所」の機能が高い。逆に、この行事に満足度を得られなかった場合、2年間にわたって大学に「居場所」を感じられないことにもつながる可能性がある。この行事の満足度を高める要因は、友人ができたか否かであることが推測される。全員参加であるだけに、非常に影響を与える行事といえる。一方、サークル活動と委員会活動は、「居場所」機能の下位尺度のうち「自由」と「自己肯定感」との関連が認められた。短大に通い

講義だけを受けている学生に比べ、課外活動に参加し満足感を得ている学生は、特に「自己肯定感」が高い。短大は2年間という短い期間であるが、その中で大学内の活動を充実させることが「居場所」の心理的機能を高めるために重要であることが示された。

(3) 「居場所環境」形成がアイデンティティ、キャリア・アイデンティティ確立に及ぼす影響の検討[研究3]

①短大における「居場所」機能とアイデンティティの関連

「居場所」の心理的機能の変化による4群を個体間要因、1回目と2回目の自我同一性尺度の得点を個体内要因とする反復測定による2要因分散分析を行った。

その結果、「Ⅰ思考内省・他者からの自由」においては、個体内変動、交互作用は認められず、自我同一性の「Ⅲ対他的同一性」のみ1回目より2回目の方が有意に高いことが示された。

「Ⅱ被受容感・精神的安定」においては、自我同一性の「Ⅰ自己斉一性・連続性」では個体間変動に有意差が認められ、「低低群」より「低高群」が高く、交互作用は認められなかった。「Ⅱ対自的同一性」でも個体間変動に有意差が認められ、「高低群」より「低高群」が高く、交互作用は認められなかった。

「Ⅲ対他的同一性」では個体間変動と個体内変動に有意差が認められ、「高低群」より「高高群」が高く、1回目より2回目の方が高かった。「Ⅳ心理社会的同一性」では、有意差が認められなかった。

「Ⅲ自己肯定感」においては、自我同一性の「Ⅰ自己斉一性・連続性」では個体間変動に有意差が認められ、「低低群」より「高高群」が高く、交互作用は認められなかった。

「Ⅱ対自的同一性」でも個体間変動に有意差が認められ、「低低群」より「高高群」が高く、交互作用は認められなかった。「Ⅲ対他的同一性」では個体間変動と個体内変動に有意差が認められ、「低低群」より「低高群」「高高群」「高低群」より「高高群」が高く、1回目より2回目の方が高かった。「Ⅳ心理社会的同一性」では、交互作用が認められたため、「居場所」の変化4群別で「Ⅳ対他的同一性」の1回目と2回目の得点を  $t$  検定したところ、「低高群」では1回目より2回目の方が高く、「高低群」では1回目より2回目の方が有意に低いという結果であった。

自我同一性との関連では、「居場所」の心理的機能の「Ⅱ被受容感・精神的安定」と「Ⅲ自己肯定感」が2年間を通して低かったままの群、あるいは高かったが下がってしまった群で、自我同一性が低いということ、さらに居場所機能の「Ⅲ自己肯定感」が下がってしまった群は自我同一性の「Ⅳ心理社会的同一

性」も低くなってしまい、上がった群は、逆の結果となった。よって、自我同一性確立のためには、大学において「被受容感・精神的安定」と「自己肯定感」を、低い人は高くなるよう、高い人はそのまま高く持ち続けられることが必要であるといえる。そのために、大学の学生支援による介入により果たしうる役割を今後検討していく必要があると考える。

## ②短大における「居場所」機能と職業レディネスの関連

1回目と2回目の因子分析の結果、1回目の因子分析は、下村・堀(1994)の尺度とほぼ同じ「Ⅰ明瞭性」「Ⅱ関与」「Ⅲ非選択性」の3因子構造が得られたが、2回目は2因子構造となり、異なった結果が得られた。2回目の因子分析は、 $\alpha$ 係数も低く、因子構造としては妥当とは言い難い。この結果は、2回目の調査の時期が2年生の11月~12月であり、この年の就職状況の厳しさを反映していると推測できる。つまり、就職活動をし続けても決まらない状況の中で学生の職業レディネスに対する意識も、混乱してしまったと考えられるのである。就職レディネスの「関与」の項目の多くが削除され、「非選択性」の項目が1因子として残ったという結果が得られ、就職難の時代に「関与」を持ち続けることの難しさを表し、またおそらく「非選択性」も就職活動においてネガティブな意味を持つものではなく、内定を取るための1つのポジティブな考え方を表しているものと考えられる。

以上のように、職業レディネス尺度は、1回目2回目が同じ因子構造とはならなかったが、以降の分析においては、1回目と2回目の結果を比較検討するため、1回目の因子分析結果をもとに、1回目、2回目の2つの下位尺度得点を算出することとした。そうすることで、削除された「関与」の比較等も可能になるためである。

「居場所」の心理的機能の変化による4群を個体間要因、1回目と2回目の職業レディネス尺度の得点を個体内要因とする反復測定による2要因分散分析を行った。

その結果、短大における「居場所」の心理的機能の「Ⅰ思考・内省、他者からの自由」においては、個体間変動、交互作用は有意差が認められず、個体内変動は「関与」で2回目より1回目の方が有意に高く、「非選択性」で1回目より2回目の方が有意に高かった。

「Ⅱ被受容感・精神的安定」においては、「関与」において交互作用の有意傾向が認められ、他の3群が1回目より2回目が下がる傾向があるのに対し、「低高群」のみ1回目より2回目の方が高い傾向が認められた。「非選択性」では、個体内変動のみ有意差が認め

られ、1回目より2回目の方が高かった。

「Ⅲ自己肯定感」においては、「明瞭性」では個体間変動で有意差が認められ、「低低群」より「高高群」が高かった。「関与」では、個体内変動で有意差が認められ2回目より1回目の方が高く、「非選択性」では逆の結果で、1回目より2回目の方が高かった。

以上の結果より、短大における「居場所」の心理的機能と職業レディネスの関係は、強い関連が見出せたとはいえない。前述したが、調査年度は社会的な不況に見舞われ、例年であれば、大多数の学生の内定が決まっている時期にもかかわらず、この年は就職活動を継続している学生の方が多かったという要因は無視できない。よって、今後も継続的に調査をしていく必要がある。しかしその中でも、短大における「Ⅱ被受容感・精神的安定」機能が、2年間の中で上がっている学生(低高群)のみ、職業レディネスの「関与」が高かったことから、就職難の厳しい状況の中でも、短大が学生にとって人から受け入れられ精神的に安定する場であることが、就職活動への「関与」を保ち続けられる要因となり得る。

したがって、大学における学生サポートにおいては、「居場所」という視点から見ると、「被受容感・精神的安定」を与え得る支援が重要といえる。学生にとって「被受容感・精神的安定」は友人から得られることが多いことが推測されるが、就職活動という自分も友人も不安定になりやすい時期においては、大学の教員やキャリア支援の職員などが、継続的に関わりを持ち、「被受容感・精神的安定」を支える存在として機能することが求められていると考える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

- ①杉本希映 短大における「居場所」の心理的機能と職業レディネスの関連 日本発達心理学会第21回大会 2010年3月27日 神戸国際会議場
- ②杉本希映 短期大学生の「居場所」の心理的機能を高める大学内活動の検討 日本カウンセリング学会第42回大会 2009年8月19日 活水女子大学
- ③杉本希映 短期大学生の「居場所環境」と大学生活不安との関連 第10回日本学校心理学会 2008年11月23日 埼玉会館 [産業財産権]

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

杉本 希映 (SUGIMOTO KIE)

湘北短期大学・生活プロデュース学科・講師

研究者番号：90508045

(2)研究分担者  
( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：